

演 題	利用者様の心の安定を目指して
副 題	不安な想いを受け止めるために

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ ナーシングプラザミタマ
施 設 名	介護老人保健施設 ナーシングプラザ三珠
フリガナ	イシワタリ ヒロヤス
発表者(職名・氏名)	石渡 裕康
フリガナ	フロアカイゴシヨクインイチドウ
共同研究者	フロア介護職員一同

【はじめに】

当施設に新規入所された M 様。慣れない施設での生活に戸惑い、悲観的な訴えや帰宅願望など不穏状態が続いていた。その雰囲気は周囲の利用者にも伝播し、フロア全体が不穏状態になる程であった。まずは M 様に対し、少しでも早く施設での生活に慣れ、安心して過ごしていただきたい、その思いから M 様に対し、想いを傾聴し対応をフロア全体で考えた過程と結果を報告する。

【入所者 M 様について】

要介護度 2 / コミュニケーション良好

障害高齢者の日常生活自立度：J2

認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅲa

徘徊行為頻回となり安全確保のため長期入所となる

【入所当初の様子】

令和 5 年 2 月に当施設に入所、本人は施設に入ることには納得しておらず、荷物をまとめてナースステーションに訪れ「家に帰りたい」「私はどうしてここにいるの?」「私のことを誰がつれてきたの?」など帰宅願望の訴えが連日聞かれた。対応職員から施設に入所している事を説明するが納得されず「私、歩いて帰る!」「もう死にたい」などと言って興奮する様子もみられていた。M 様の不満やストレスを軽減し解決に向かう方法はないか、本人の要望の傾聴や、生活歴からヒントを得られないか、フロア職員で思考し、以下の方法を実施した。

【方法と経過】

<一時帰宅への同行> 帰宅要求に対する解決策を模索するべく、ご家族様の協力を得て、ご自宅へ外出することとした。職員付き添いにて家に着くと「久しぶりに来た!」「汚い部屋でごめんね」と嬉しそうに話す姿がみられた。仏壇に手を合わせ涙ぐまれたり、「次来的时候はご近所にご挨拶しないと!」「次はタンスの着物を見たい」等の前向きな発言が聞かれた。施設に戻ると、自宅に行ったことは忘れてしまっていたが、それから一時帰宅を繰り返すことで入所当初と比較すると帰宅願望や悲観的な発言は減少し、代わりに明るい表情がみられることが増えた。

<M 様による着付け教室>

M 様の生活歴を遡ると、日本舞踊や編み物を若い頃

から嗜んでいた。特に日本舞踊では踊りだけでなく、着付けの師範の経歴がある。そこで私達は M 様の技能を活かし、またそれによる充足感の向上を図るため、職員向けの着付け教室を企画した。

教室を開催する上で、着物や帯を数名の職員から提供してもらった。着付け教室の開催をご本人様に打診すると、最初は「もう忘れてしまったわ」などと謙遜しつつも、我々の提案にうれしそうにに応じてくださった。

実際に始めてみると「ここはこうするのよ」などと言いながらとても手際よく、長年のブランクを感じさせない様子で着物を着付け、帯を結び上げた。

周りの利用者様も普段とは違う M 様の生き生きとした様子にたいへん驚き、喜ばれ、その後の会話やコミュニケーションも円滑に運ぶようになった。

【考察】

田中は「安定した生活を過ごしてもらうための接遇は、いかになじみの関係を構築できるかにかかっている」とし、それには「高齢者の言うことを、たとえつじつまが合わないことであっても、まず初めに事実として受け容れようとする態度を示すことである」<sup>1)</sup>と述べている。今回の事例でも、M 様の訴えを否定せず、受け入れ、実際に行動に移すことで、良い結果が得られたと考える。

【結論】

介護職に従事している人なら、一度は利用者様に帰宅願望を訴えられた経験があるだろう。そしてその際に、気を逸らしたり、説得を試みるといった「非受容的な対応」は、十分な効果を得られないどころか、ますます利用者様を混乱させ、不安にさせてしまうことも体験されているであろう。今回我々は、M 様の訴えを傾聴・受容し、人生経験までも肯定することで、施設を安寧の場として感じていただけようになった。認知症高齢者はしばしば過去の環境や状況に戻りたいという願望が強く表出される。その願望を受容することで、安心感と幸福感に寄与できるという知見を得ることができた。

【引用文献】

1) 田中安平. 介護の本質. インデックス出版, 2005, p. 198.